



Title	W.ベンヤミンのカフカ像をめぐって
Author(s)	園田, 尚弘
Citation	長崎大学教養部紀要. 人文科学篇. 1994, 34(2), p.117-126
Issue Date	1994-01-31
URL	http://hdl.handle.net/10069/15333
Right	

This document is downloaded at: 2019-04-19T02:51:16Z

W. ベンヤミンのカフカ像をめぐって

園 田 尚 弘

Über das Kafka-Bild von W. Benjamin

NAOHIRO SONODA

はじめに

G. ショレムはその著、『ヴァルター・ベンヤミン、ある友情の歴史』のなかで、カフカはプルーストと並んで、ベンヤミンが最も親近性を感じていた作家であったと述べている。事実、ベンヤミンは、カフカには早くから注目しており、彼の短編小説や長編小説に関して、しばしば、賞讃の辞を記している。亡命の地パリでドイツの前衛的文芸をフランスの公衆に伝える計画のなかで、ベンヤミンが長編小説のジャンルで選んだ作家はカフカであった。

H・シュヴェッペンホイザーが編集した『カフカに関するベンヤミン』（Benjamin Uber Kafka, stw 341）においても、テキストの部に、年代順に記すと、『紳士のモラル』、『万里の長城の築かれたとき』、『フランツ・カフカ』、更に死後に発表された『マクス・プロートのフランツ・カフカ』が収められている。ベンヤミンがカフカに多大の関心を寄せていた証になるだろう。これらの書評やエッセイを素材に、さらには、上述のシュヴェッペンホイザーの編著に収められているカフカ関係の書簡や断片的メモを併用しながら、ベンヤミンのカフカ像をさぐってゆくつもりである。次にベンヤミンのカフカ研究がベンヤミンの周囲にひき起こした反響をさぐってみたい。このテーマに関してはすでにH.マイヤーの仕事があるが、本稿は、その仕事に多大の恩恵をこうむっている。私としては、ベンヤミンのカフカ研究にあっては、ブレヒトの影響が非常に大きいこと、さらに、マイヤーが軽視しているように見えるW. クラクトの影響を今少し多大に考える見解を、つけ加えたいと思っている。

I. 『フランツ・カフカ』（1934）

ベンヤミンが、カフカの没後十周年にあたって、1934年に発表した『フランツ・カ

『カフカ』は美しい構成をもったカフカ論である。全体は4つの部分に分れ、各部の冒頭には、その部分の論旨を含蓄深く先取りしているエピソード、寓話が置かれている。第1の部分は、ポチョムキンへのデプレッションにまつわる逸話ではじまっている。ベンヤミンはこの話を語りながら、カフカにおける役所の世界と家庭の類似について指摘する。腐敗、墮落した寄生的存在としての権力はカフカの作品における家庭の父親に相当する。家庭のなかにとらわれたカフカの生きものたちの救いのなさを、ベンヤミンは、マクス・ブロートが伝えるブロートとカフカの対話によって裏づけようとする。あるとき、ブロートはヨーロッパと人類の没落についてカフカと話したことがあった。カフカはそのとき、「われわれは神の頭のなかに浮かびでる虚無的な考え、自殺の思いつきそのものである。」といったという。ブロートの「それでは希望はないのか」という問いに、カフカは「いや希望は大いにある。しかしわれわれにとってではないのだ」と答える。カフカの作品にあって希望が残されているのは、ベンヤミンにとっては、家庭から脱れているものたち、たとえば『城』の助手たち、南の国の愚か者、(観察)、『アメリカ』の大学生である、「生物として発育不全な未熟なものたちにとっては希望が残されている。」こうした形象の系列は神話世界を予想させるが、カフカにあっては、しかし、神話の世界は、「理性とたくらみ」によってその力を失ってしまう。だからカフカは神話の素材を利用しながら、「弁証家のための童話」を書こうとしたのだとベンヤミンは言う。童話とは、ベンヤミンにあっては「神話が人類の胸のうえにおいた夢魔をはらいおとすに人類がとったごく初期の処置についてばかりに知識を与えてくれる」ものである。「童話は愚者の姿によって、人類が神話に対抗して『愚をよそおうさま』を示し、いちばん末の弟の姿によって、神話的な太古の時代から遠ざかるにつれて人類のほうにより多くのチャンスがうまれてくることを示す。」(ベンヤミン、物語作家) 第一部の終りには歌ひめヨゼフィーネの名があげられている。意気阻喪させるカフカの迷宮のなかでヨゼフィーネも希望につながる形象のひとつなのだろう。かの女の歌いかたにみられる「あわれな幼ない日々」、異郷にあってベンヤミン自身があこがれた幼年時代が引用される。そしてそれは第二部冒頭のカフカの幼年時代の写真の記述に接続される。もちろんこの写真ではカフカの瞳の悲しみが写しだされているとベンヤミンは言うのだが。この第二の部分においてベンヤミンが強調しているのは、カフカの習作や物語においてみられる身振りの重要性である。「カフカの全作品は身振りの法典である。」とまでベンヤミンは言っている。しかもこの身振りがカフカにとって一番難解であった。身振りに対する詮索はカフカにあってはかぎりがない。この詮索ということについて言えば「訴訟」(der Prozeß)における寓話「掟の前で」で展開される助任司祭とKの対話が想起される。この寓話と長編小説『訴訟』の関係はユダヤ教におけるハガダーとハラハーの関係に似ているものと

扱えられる。しかしカフカの作品には教訓（つまりハラハーにあたるもの）は含まれていないという。

身振りが問題となる場は劇場である。カフカの作品世界では野外劇場ということになる。ベンヤミンは『アメリカ』の野外劇場(Naturtheater)を重視し、この劇場を志願するものが何らかの職を与えられるこの場所を、カフカの作品全体の希望につながっているようにみえる。

カフカの世界の中心はタルムートの村であると言われている。タルムートの伝説によると、魂は肉体という村に流刑に処されているという。この村の空気はにごっていて、堪えがたい。カフカはこの村で、占い師としてでもなく、また教祖としてでもなく堪えつつ生きてゆかねばならなかったという文章で第二部は締めくくられている。

恐らく、第二の部分の最後にあらわれた教祖としてのカフカという扱え方と関連して、ハムスンをめぐるエピソードが第三部の冒頭で語られている。もちろんこのエピソードが語るところは、芸術家の作品自体と作者自身によるその作品の解釈の齟齬ということであり、作品こそが重視されねばならぬことをこのエピソードは語っている。しかし教祖カフカというイメージは、カフカ解釈の傾向を紹介する第三の部分につながっている。

カフカの作品については早くからさまざまな方向の解釈の試みがなされてきた。すでに、カフカの友人であり、カフカの遺作の刊行人であったブロートがカフカの作品に宗教哲学的図式をおしつけていた。この種の神学的解釈にことかくことはなく、ベンヤミンは、それらの解釈者の名を挙げて、超自然的解釈と呼んでいる。こうした解釈と並んでベンヤミンが批判しているのが精神分析的解釈である。これらの解釈は、自らの思弁的内容を、カフカのモチーフに顧慮することなしに、恣意的に展開する。それゆえベンヤミンは、カフカのモチーフだけでも展開することのほうが、こうした思弁よりはどんなに有益かを力説する。そしてベンヤミン自身は独自の哲学的観点から、記憶と忘却のテーマをカフカの作品のなかに探っていく。ベンヤミンによれば、カフカの小説の世界は、バウハーフエンの太古の世界が現代にずれこんだ世界である。太古の世界は忘れられているから現代にそのまま続き、現代をおびやかしている。忘れられた世界を思いだすための媒介となるのが、カフカに特有の動物、動物になった人間や醜いものなどである。そしてこれらの存在はあの『ベルリンの幼年時代』の最後の短章にも姿をあらわすせむしの小人に結びつく。つまりせむしの小人はこれらの雑種的存在の原像であって、忘却の比喩と解される。こうした醜いもの、動物などを抱きとめることができたカフカの注意深さを、ベンヤミンは読者に指摘する。

「サンチョ・パンサ」と題された第四の部分の冒頭には、あるユダヤ人の村の居酒屋での話が置かれている。ベンヤミンはこの話がカフカの世界と通ずるものがあると

説明し、時間の問題を指摘する。もしメシアが現れるとしたら、メシアは空間ではなく時間の歪みを正すだろうというのである。現実の人生の時間は短い、回想の時間は十分に長いと思われるとベンヤミンは回想について記す。彼が希望を寄せた生きものたちは、この第四の部分では、父王の短かさを計算に入れた生きものとして扱われる。この生きものたちは、忘却のすさまじい風に抗して回想につとめる。忘却に抗して回想がめざすのは自己を理解せんがためである。ベンヤミンによって救済される可能性がある」と形容される『アメリカ』の大学生の「勉学」はこうした忘却に対抗するための身振りなのだ。「勉学」はまた、神話に抗するための足がかりになる正義への門であると言われている。

II. 1938年のショレムあて書簡から

エッセイ「フランツ・カフカ」はベンヤミンにとって十分な出来栄とは思えなかった。1938年6月12日のショレムあての手紙のなかで、「弁護論的性格がこのエッセイに内在するために、気に入らない」と述べている。彼はこの手紙のなかで1934年のエッセイとは別な観点をもったカフカ像を紹介し、できれば書物として出版したい意向も有していた。テーマをカフカに限定したこの書簡で、ベンヤミンはプロートが著わした『フランツ・カフカ、ひとつの伝記』（1937）を厳しく批判している。批判の要点は、プロートが、カフカを論ずるのに度を越しているということである。カフカを聖者扱いしながら、自らは必要な距離をおかず、もっとも敬虔ならざる態度をとっていること、自己以外のカフカ解釈を一切うけつけず、自らは空疎で大仰なやり方でカフカを誤解しているとベンヤミンはプロートを徹底的に非難している。

プロートのカフカ伝を拒否したあと、ベンヤミンは自らのカフカ像を凝縮したかたちで提示している。ベンヤミンはここで挫折者としてのカフカを強調している。ベンヤミンは、「カフカの姿を、その純粹さとユニークな美しさを歪めずにえがきだすためには、それが挫折したひとの姿である、ということからけっして目を離してはならない。」と言う。最後の失敗をカフカが確信していたから、途上のすべてが「夢」のようにうまくいったのだとベンヤミンは説明する、ここで強調されているカフカの挫折が1934年のエッセイで語られなかったわけではない。そこではカフカの挫折は作家としての挫折であったとされる。カフカは作品において実現したいと願ったことを成就できなかった。「文芸を教訓に移行させ、寓話として文芸に堅固さと地味さを復活させようとした彼の壮大な試みは挫折した。」つまりベンヤミンにとってカフカは

寓話作家(Paraboliker)である。この形式はもともとモラルを含んでいる形式であるが、掟のわからない現代の世界にあっては、寓話は困難になる。カフカが作品焼却を望んだのは、作品に不満が残るからであった。

ショレムあての書簡では、「カフカの挫折の事情としては、いろいろなことがあるだろう。」と言われ、多面的にその事情が扱われている。しかしまたその挫折者としてのカフカを前面に押し出すことが、書き改められるべきカフカ像の最重要点であったことが推測される。

Ⅲ. ブレヒトとショレムの影

『ブレヒトとの対話』において、1934年のベンヤミンのカフカに関するエッセイについて論評するブレヒトの言葉は容赦がない。ベンヤミンのカフカ論はユダヤファシズムに手を貸すものだと手きびしく批判されている。またそこで下ろされるカフカ自身への評価も手きびしい。ブレヒトはカフカにもベンヤミンのカフカ論にもまったく理解を示していないように思われる。しかしベンヤミン自身は、ブレヒトの批判に反批判をもって答えているが、一般に信じられているほどに両者のカフカ観が水と油のように異なっているとは思われない。ベンヤミンはブレヒトから手きびしく批判を受けながら、ブレヒトのカフカ評からきっぱりと離れることができなかつたように思われる。例えば1931年 6月 6日の記述を見ると、ブレヒトはカフカのなかに予言的作家を見ている。ブレヒトの真意がいかなるところにあったか推測するのは難しいが1931年にベンヤミンが行なったラジオ放送は、カフカの作品を予言的であると性格づけている。あるいはまたカフカを挫折した作家ととらえる視点は、『ブレヒトとの対話』によれば、ブレヒトが提示している。ブレヒトはここで真剣に文学ととりくむ幻想的タイプと完全に真剣というわけではない理想的なタイプにわけ、カフカの場合は、この両者が対抗しているという。ベンヤミンがそのエッセイで「文芸を教訓に移行させ、寓話としてそれに堅固さと地味さを回復させようとする試み」とカフカの意向を説明するとき、ブレヒトの視点が利用されているのが感じられる。先に述べた1938年 6月 12日のショレムあて書簡で、ベンヤミンは、「カフカの作品は楕円であり、その遠く離れた焦点は、一方では、神秘的経験によって（何よりもまず伝統についての経験）によって、他方では今日の大都市の人間の経験によって規定されている。」と述べる。後者の焦点は、ベンヤミンによって、拡大、深化されているが、対話においてブレヒトが『訴訟』について展開した都市住民の経験が加味されていることが推測される。

このようなブレヒトのカフカ評とベンヤミンのそれとをつき合せて考えると、なるほどカフカエッセイに対するブレヒトの反応は無理解というに近いが、ベンヤミンの側では、1938年の段階にあっても、カフカの作品に全体主義的管理社会の恐怖の予見をみようとするブレヒトの意見に添ってカフカを把えようとする姿勢がみられる。

※

カフカ問題は、ベンヤミンとショレムの文通の大きなテーマのひとつであった。「ショレムにとってカフカの作品は、ショレムの精神的世界のなかで中心的位置を占めている。」、それゆえベンヤミンは自らのカフカ論を考えるにあたって、幾度もショレムの意見を求めている。それは、ショレムの見解と自らのそれを対比して、自らの立場をより明確にしてゆくためであった。

カフカの遺稿、『シナの長城が築かれたとき』が刊行されたとき、ベンヤミンはそれについてラジオ放送を行なっている。その原稿をまとめるのに難渋して、彼はショレムに意見を求めている。ショレムは、カフカについての探求はすべて『ヨブの書』から初めるか、少なくとも神の審判の可能性についての議論に関して、文芸作品のなかでとり扱うようにすすめている。(1931年 8月 1日付書簡) これより3年後にカフカに関するベンヤミンとショレムの文通は頂点に達する。ベンヤミンは当時、『フランツ・カフカ没後十年にあたって』の執筆にたずさわっていた。ショレムはベンヤミンに勧めた忠告を、自ら実行するかのようにカフカの『訴訟』を題材に、それぞれ四行から成る14連の詩を送付している。

この詩のなかでショレムは神が隠れている時代の空虚さと虚為性について叙べる。しかも神から離れているという感情が、われわれの時代が啓示を体験することができる唯一の形式であるという。カフカの世界は、隠された裁判として語られている。この裁判では、被告は人であるのか、神であるのか、わからない、そもそもそうした問いが可能か、その答えはどうかと問うたあと、ショレムは、答えが与えられぬままに、人は神の法廷が始まるまで生きてゆかねばならぬと叙べて、その詩をしめくくっている。

ショレムがベンヤミンと同じように、マクス、プロート流の粗雑な神学的解釈を拒否しているのは明らかである。しかしまたショレムにとって、カフカの重要性が、カフカがカバラの世界を解読するのに役立つ作家であり、またカフカを解読するためにカバラを利用するという点にあるのだから¹⁾、ベンヤミンが、ショレムと同じようにカフカを読むことは無理である。ショレムはくり返し、カフカの掟の概念を重視することを勧めている。しかし、ベンヤミンはカフカにおける掟の概念は、模造品であるとみなしている。(1934年11月12日、クラフト宛て)

「カフカの世界は、啓示の世界である。もちろん啓示が無になってしまう遠近法の

なかでのことだが、」と書くショレムとベンヤミンがカフカ解釈で同一線上に並ぶことはないが、カフカの作品にみられる「否定的兆候」を評価することでは一致している。ベンヤミンは「カフカの作品は、伝統が病んでいることを示している。」という。カフカにあっては伝統は、真理の叙事的側面と言われる叡智の内容を、喪失してしまった。そして叡智の崩壊の所産だけが残されている。残されているのは、真理についての噂と愚かさだけであるとベンヤミンは述べている。シュテファン・モーゼスは、ショレムの後年の論文「神の名前」における言葉の意味の取り扱いが、1938年のショレムにあてた手紙で展開されたベンヤミンのカフカ解釈とはるかに呼応すると述べて、両者のカフカ解釈の親近性を指摘している。2)

IV. アドルノとクラフトのカフカ・エッセイへの批判

ベンヤミンは自らのカフカ・エッセイをアドルノの熱心な依頼に応じて1934年に送付した。アドルノは、カフカ・エッセイの仕事によって、ベンヤミンと自分の哲学の中心点の一致がよりはっきりと意識されたと返答している。アドルノもショレムと同じくベンヤミンが拒否した自然的、超自然的カフカ解釈に反対する。そして自らとベンヤミンの哲学における神学的側面を「さかさまの神学」と名づけている。アドルノはこの他にも、さまざまな点での彼とベンヤミンの一致を語っているが、「根源史と近代の弁証法」が十分に練りあげられていないとあってカフカ・エッセイを批判している。しかもこの批判をベンヤミンの『パッサージュ論』にも広げている。カフカ・エッセイをベンヤミンが未完成と呼ばなければいけないのは、『パッサージュ論』における根源史と現代の弁証法の問題が片づけられていないからであるというのである。

ベンヤミンは、アドルノの指摘に対して、それが自らのカフカ・エッセイに対して重要な意味を有していることを認めている。また古いものと新しいものとの関係の問題を『パッサージュ論』にも広げている点も、ベンヤミンの『パリ・十九世紀の首都』フランス語草稿を読めば、その問題が考慮に入れられていることが認められるだろう。しかしさしあたってカフカ論について言えば、ベンヤミンにとっては、1938年のショレムあて書簡にみられるように、挫折者カフカというカフカ像、二つの中心を有する楕円としての作品世界を明瞭化することが急務であったであろう。アドルノはこまごまとした指摘を、ベンヤミンのカフカ・エッセイに加えているが、アドルノ自身の「カフカ覚書き」(プリズム所収、stw178)を読めば、アドルノのカフカをめぐる問題意識が、ベンヤミンのカフカ解釈のなかにすでに提出されているように思われる。

『覚書き』は、誤ったカフカ解釈からうまれているカフカの名声の指摘につづき、作者自身の形而上学的作品解釈による作品理解の不当性を訴えている。アドルノはフロイトや表現主義を採用しながら、カフカの小説世界とナチズムとの類似、腐敗した資本主義の暗号文としてのカフカの世界について語っている。アドルノにとって、カフカは究極的には、啓蒙の伝統に連なる芸術家である。カフカの作品には神話的諸力が姿を現している。神話は克服されてはいない。しかしカフカが神話を修正しようとする努力において、カフカは啓蒙の伝説に属している。アドルノが展開する議論が、彼とホルクハイマーの著作『啓蒙の弁証法』と関連づけられること、そしてカフカと神話をめぐる解釈が、すでにベンヤミンのカフカ・エッセイにおいて独創的に述べられていることを、われわれは想起するであろう。

※

後に大部のカフカ論を完成するW・クラフトともベンヤミンはカフカに関して書簡をとりかわしている。ベンヤミンは、クラフトの堅実なカフカ解釈を高く評価していた。ベンヤミンのカフカ・エッセイを読んだクラフトは1934年9月16日に、ベンヤミンにあてて、このエッセイへの批判を寄せている。彼の指摘は、多岐にわたっているが、ベンヤミンによって「弾薬庫のあいだの矢のよう」と形容されるように、全体として、幾分おずおずとした気味のものである。クラフトの感想は、要約すれば、次のような点をめぐる。論文の全体の論旨を読者に納得してもらうためには、そこで展開される主導的イデオロギイをもっと明確にしなければならないということ。神秘的、神話的叙述形式を、冷徹な教説(Lehrvortrag)にまとめるということである。カフカの個々の作品に関するクラフトの解釈あるいはモチーフの解明に関して、ベンヤミンは、これを十分に考慮に入れて、カフカ・エッセイの改稿に着手しようと計画していた。

V. 自画像としての挫折者カフカ

これまで、われわれは、ベンヤミンのカフカ解釈、それに対するブレヒト、ショレム、アドルノ、そしてW・クラフトの批評について述べてきた。先に述べたように、ベンヤミンは、自らのカフカ・エッセイが友人間にひき起こしたさまざまな共感、反対、批判を熟読、熟慮しつつ、カフカ像の修正を試みた。それが、ショレムあて書簡で述べられた挫折者としてのカフカというイメージであった。

このようなカフカ像に、われわれは、H・マイヤーの言うように、ベンヤミンの自画像が重ね合わされているのを見ることができよう。ベンヤミンは、1932年、『パッサージュ論』やハシシュに関する文章など未完成の原稿を抱えたまま、自殺を企図した。彼は恐らくは死ぬことの無益さを感じて一応はこの危機をのりこえたのだが、そのときの経験から、カフカの場合についてもよく理解できたのであろう。

おわりに

『小さな騎行』というカフカの小品がある。ブレヒトとベンヤミンがそれについて自らの解釈を述べている。後に、クラフトも同じ小品について『カフカ』のなかで解釈を行っている。三者のなかでは、クラフトのそれがもっともよくカフカの小品に即して行われているように思われる。ベンヤミンの解釈は、カフカの小品を超え出て、カフカを素材に、自らの思想を展開しているようにみえる。同じことがベンヤミンのカフカ解釈全体についても言えるように思われる。

註

1. Stephan Moses: Das Kafka-Bild Gerschom Scholems, in Merkur, Heft 9 Sep, 1979. S. 862
2. Ebenda. S. 867

(1993年 7月13日受理)

